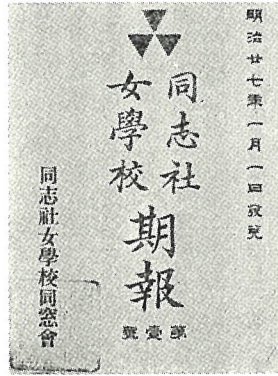


『同志社女学校期報』



一、序

本誌は、一八九四（明治二七）年から一九四二（昭和一七）年までの、ほぼ半世紀にわたる

同志社女子部（現在の女子中・高校ならびに女子大学の前身）の古き良き時代の面影を伝える貴重な資料であり、女子部の歴史を語る上で欠くことのできない文献の一つである。

二、誕生

同志社百年の歴史は、決して平坦なものではなかった。女学校の歴史もまた然りである。一八七七（明治一〇）年に創立された女学校は、一八八五（明治一八）年、および一八九〇（明治二三）年には、廃校もやむなしと思われるほどの危機に直面した。このような危機

に際し、数少ない卒業生、在校生は、常に心を痛め、卒先して寄附を企て、募金を行い、その存続を計った。

この母校を思う熱意と行動は、やがて具体的に、恒常的なものへと結実した。すなわち、一八九三（明治二六）年六月、第一〇回の卒業式を期に、同窓生を中心とする九六名のもものは同志社女学校同窓会の創設を計り、六月二十八日、その創立總會を開くに至ったのである。

席上、「會員相互の交誼を親密にし、且同志社女学校の益を計る」ことを目的とする会則を定め、役員を選出を行うと共に、同窓会独自の事業として「新島文庫」の運営を行い併せて「毎期一回、女学校及同窓会の報告を出版して會員に配布すること」を決議した。

『同志社同窓会期報』は、この決定にもとづいて誕生したものであり、第一号は、一八九四（明治二七）年一月一日に呱呱の声をあげた。

三、性質

本誌は、誌名を『同志社女学校期報』とつたっているが、これは、同窓会がその事業の一環として発刊したものであり、決して女学

校の会報ではなかった。この点については、第一号から第一六号まで、毎号、表紙裏の右上、目次のすぐ前に「本誌の性質」と題する次のような文章によって明らかである。此期報は同志社女学校の名を冠すれども其実女学校を代表するものにあらず、常に校内の同窓会が本校教師と謀り、一年二回発刊し一には校内の事変を報告して之に對する同情を養ひ一には各自の消息を交換して其親睦を全ふするものなり。

かくて、本誌、第一号を見ると、巻頭に、「期報」として、女学校教頭、松浦政素の筆に成る「同志社女学校の特質」と題する一文をはじめ、「論説」として、女学校内で行われた坪内雄蔵（逍遙）の「女子と文学」および蔵原惟郭の「女子教育の方針」という二つの講演筆記原稿、さらには、「雜録」、「記事」として「夏期伝道報告」など学内の近況を伝えるものや、同窓会および同窓会員の消息など、同窓生たちが、この小冊子を手にすることによって、さながら校内にあるがごとき感を持ち、母校愛のおのずから湧き出でるよう編集されている。本誌のこのような形態あるいは役割は、その後、五〇年に及ぶ歴史の中

に、ほぼ一貫して存在し続けている。

本誌発行のための経費は、同窓会の会則第七条により、一人当たり、年一八銭の出版費の会員負担によってまかなわれていた。ちなみに、第三回の同窓会大会における会計報告を見ると、第一号、第二号の出版経費一四円四〇銭のうち、一二元九〇銭は、前記の会費収入によるものであった。

四、沿革

本誌初代の編集人は、同窓会の役員の一入竹内多計子であった。しかし、第三号以降は第一号からの発行人として名を連ねていた松浦政素が兼ねるようになり、一六号まで続いている。

一九〇一（明治三四）年、松浦が病を得て東上した後は、大塚素（二七号）、青木澄十郎（二八号）、千葉勇五郎（二九号から二二二号）、和田琳熊（二二三号から二四四号）、中瀬古六郎（二二五号から二三三号）と、歴代の教頭あるいは校長が、その役割を担当している。しかし、このように編集人は次々と変わっても、編集方針は、すでに述べた松浦の基本路線をほとんどそのまま受け継いでおり、変化としては、和田時代

の二三号から口絵写真が入るようになったこと、二四号が女学校設立三十周年を記念するものとして、従来の現状報告に止まらず、「同志社女学校三十年略史」（和田）など歴史的な記事を取り入れていることなどがあげられる。中瀬古時代には、新たに「説苑」（のちには「論説」欄が設けられ、女学校教員などの署名原稿が採用されはじめた。ちなみに、二五号には、国語担当の藤井寅一の「京都と美的生活」とおよび東西文学史担当の高安月郊の「細川越中守の北の方」が掲載されている。

第三四号からは、従来の教頭、校長に代わって、新たに同窓会長に就任した松田道が編集兼発行人となり、内容も次第に、同窓会期報と言うべき色合いを濃くするようになった。

しかし、松田の後をうけて中目瀧子が同窓会長につき、期報の編集責任者となつて間もなく、一九一七（大正六）年、女学校に教職員と学生を構成メンバーとし、校長を名誉会長（のちに会長とする）学友会が生まれ、本誌も学友会と同窓会の二者によって発行される運びとなった。

これと共に、紙面に、教員の署名原稿も次

第にふえはじめ、従来の広報、親睦誌的性格に学術誌的な色彩が加味されるようになった。そして、誌名も、第五五号より、『同志社同窓会、学友会期報』と変わり、表紙の発行者を示す文字も同志社女学校同窓会から同志社女子専門学校、同志社高等女学部が変わった。しかし、これは、一九三五(昭和一〇)年の「創立六〇周年記念号」(第六一号までで終わり、六二号からは『同志社同窓会報』となり、またもや同窓会、単独のものという体裁を持つようになった。

その後、本誌も、強まる軍事体制の下で次第に戦時色を深めながらも、戦争の激化する中で、用紙の入手が困難となり、一九四二(昭和一七)年、ついに休刊のやむなきに至った。

五、内容

本誌は、同志社女子部の歴史を語る上で欠くことのできない資料であると共に、その教育理念を知るための良き指針となりうるものである。すなわち、すでに述べたように、第一号冒頭において松浦は、「同志社女学校の特質」を述べ、その開校の基本理念が、「国家

改進の大事業」に参与しうる女子の養成にあらたことをあきらかにしている。すなわち、「故新島襄先生、……世人の女子教育に対する觀念の尚模稜たりしとき、早く己に国家改進の大事業の、鬚眉男子の手にのみ委すべからずして、巾幗の織手亦之に与て始て功を全ふすべきを看破せられ、茲に我同志社女学校を開かる」と。また、杉浦は、教頭として、「我校の特質と許し、特質たらしめんとする所の点」を次の五つに要約している。(1)「新島先生の精神、信仰、品格、主義」の継承。(2)「外、温順にして、内、堅固なる」人物の養成。(3)「風儀の質素」。(4)「形式に於て我國在来の慣習に学び、精神に於て西洋文物に則る」教育。(5)真正の「基督教主義」の実践である。

さらに第二号の「資金募集趣意書」にも、「我校が現に執る所の方針は……中庸に在り……一方には単に優美なる人形を造出するに満足せず多少邦家の改良に一臂を揮ふべき技倆を備ふる女子を陶冶すると共に夫の偏僻なる弊風を脱して真に我國の需要に適切なる人物を出さんとするに在り」と述べている。

このような女子部の教育理念は、やがて一

九一〇(明治四三年、当時教育顧問であった松本亦太郎の「高等女学校以上の程度に於て女子の精神を開発する為めに高尚なる文藝的或は自然科学的、或は精神科学的の知識を授くるを目的として居る女学校」(「女子高等教育機関の設置問題」二八号)の設置を求める気運を高め、次第に「同志社女学校に大学部を開設せざる可らず」(同志社女子大学部設置に関する私見三三号)という状況を生み出し、ついに「同志社女学校専門学部開設劈頭の所感」と題する松本の喜びにみちた原稿を三三号に飾るに至った。

かくて、本誌によって新島襄の目指した女子教育の理念が、着々と花開き実を結んできた姿を見出すことができるのである。

この外、同志社女子部の教育について、また、その研究上の成果の一端を示す諸論稿として、海老名弾正、中瀬古六郎、原田 助、雀部顕宣、水崎基一、山中 百、恒藤 恭、松田 道、滝山徳三、中桐道太郎、加藤龍太郎氏などの、いまは懐かしき思い出の人々のものが数多く存在する。

(坂本武人・女子大学教授)